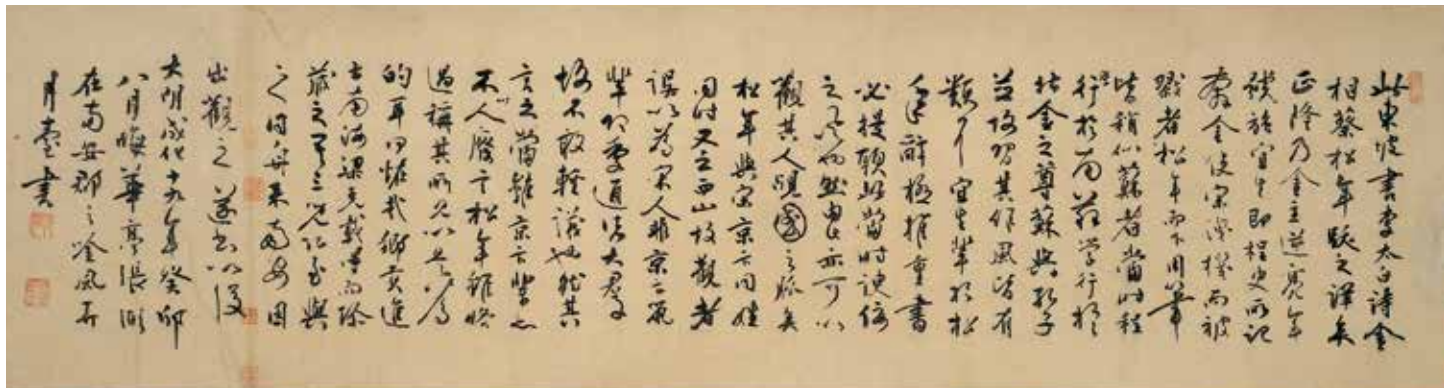


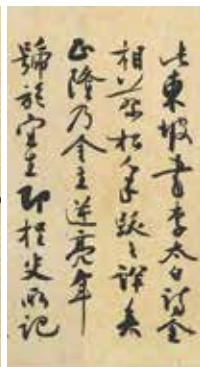
張弼「蘇軾行書李白仙詩卷跋」について



【図1】



【図4-2】



【図4-1】



【図3】



【図2】

【図1】張弼「蘇軾行書李白仙詩卷跋」
 【図2】蘇軾「行書李白仙詩」
 【図3】張弼「草書李白仙詩卷」 蘇書部分
 【図4-1・2】同 自跋部分(冒頭・末尾)

本館の所蔵する蘇軾「行書李白仙詩」(重要文化財)は、「黃州寒食詩」(台北・國立故宮博物院蔵)とともに蘇書を代表する劇蹟である。また後ろに付された金の蔡松年・施宜生・劉沂・高衍・蔡珪の五人の跋は、金人の書蹟の貴重な遺品としてつとに知られる。これに次ぐのが、ここで取り上げる明の張弼の跋【図1】で、さらに清の高士奇と沈德潜の跋が存する。他に、この卷子の中国での通伝を知る手がかりとなる収蔵印や題簽としては、元の趙孟頫・喬篔成、明の毛晋、清の王鴻緒・劉恕・韓崇・程禎義、清末民初の蘇桂縻・蘇元瑞のものが確認できる。しかしながら、これだけの名品にあっては、思いのほか少ないのが残念である。

張弼(1425-1487)は、字を汝弼といい、東海と号した。華亭(今の上海市松江)の人。江西省南安府の知事となり、賊を壊滅させ、橋梁や道路を整備し、乱れた風俗を教化するなど、大いに治績を挙げて民に慕われた。詩文にすぐれたほか、とりわけ書で名高く、懷素や張旭に学んだ狂草は一世を風靡した。酒酣にして興に乗ると、筆を走らせてたちどころに数十紙を作り、人々はたちまち持ち去ったという。それを想わせる草書作品も遺されてはいるが、本作は明初以来の書風を受け継ぎ、縦逸ながらも規矩を守った行書の逸品である。成化十九年(1483)、南海(広東

省)出身の梁克載が弼の三男の弘至とともに南安に来て、この蘇書を示したと述べている。

ところで、この跋に関連する興味深い作品が伝世している。「草書李白謫仙詩卷」といわれる一点で、現在は天津博物館に蔵されている。その冒頭には、本館蔵蘇軾「行書李白仙詩」巻の本紙【図2】と蔡松年跋の部分がそのまま写されている【図3】。次いで、この後の施宜生以下四段の跋はみな諛辞(へつらいの言葉)なので録さない旨を識し、続けて【図1】の自らの跋を書き留めている【図4-1・2】。最後には、「私はすでに克載のために此の巻に跋し畢ったが、弘至がこれを記録しようと望んだので燭台のもと筆を援った…」とある。

書画録を作成するのであれば、こうした手控えを残す必要があるわけだが、一部を割愛していることから、単に貴重な蘇軾の作品を過眼した喜びを記録して、息子とともに共有したかったのであろうか。蘇書を写すにしても、文字を追うのが主で臨書とは言えないが、書風が若干原典に引きずられるような部分も垣間見える。いずれにしても、名蹟と後代の名家による写しとが共に今に伝わる極めて珍しい遺例である。

(弓野隆之)